

PATENT ABSTRACTS OF JAPAN

(11)Publication number : 56-157468

(43)Date of publication of application : 04.12.1981

(51)Int.Cl. C09D 11/00

(21)Application number : 55-059603 (71)Applicant : CANON INC

(22)Date of filing : 06.05.1980 (72)Inventor : MATSU FUJI YOJI
SAKAEDA TAKESHI
YANO YASUHIRO
OOTA NORIYA
HARUTA MASAHIRO

(54) RECORDING SOLUTION

(57)Abstract:

PURPOSE: An inkjet recording ink with excellent jet and shelf stability, clarity, water resistance, etc., prepared by dispersing a fine pigment particle in an aqueous dispersion medium, a ratio of MW of the pigment to average MW of the polymer being in a specified range.

CONSTITUTION: A recording soln. is prepared by dispersing a fine pigment particle (all org. and inorg. pigments are usable) in an aqueous dispersion medium prepared by use of a polymer (e.g., a styrene-maleic acid copolymer) of MW 1,000W100,000, having both hydrophilic and hydrophobic structure portions as the first component and an aqueous liquid (e.g., a liquid mixture of water and diethylene glycol) as the second component. Where a ratio of MW of the pigment to average MW of the polymer is defined to range 1:2W1:150, resulting in good dispersion stability and good driving frequency responsiveness during jet.

LEGAL STATUS

[Date of request for examination]

[Date of sending the examiner's decision of rejection]

[Kind of final disposal of application other than the examiner's decision of rejection or application converted registration]

[Date of final disposal for application]

[Patent number]

[Date of registration]

[Number of appeal against examiner's decision of rejection]

[Date of requesting appeal against examiner's decision of rejection]

[Date of extinction of right]

Copyright (C); 1998,2000 Japanese Patent Office

⑯ 日本国特許庁 (JP)
⑰ 公開特許公報 (A)

⑮ 特許出願公開
昭56-157468

⑯ Int. Cl.³
C 09 D 11/00

識別記号
101

府内整理番号
7455-4J

⑯ 公開 昭和56年(1981)12月4日
発明の数 1
審査請求 未請求

(全 7 頁)

⑯ 記録液

⑰ 特 願 昭55-59603

⑰ 出 願 昭55(1980)5月6日

⑰ 発明者 松藤洋治
東京都大田区下丸子3丁目30番
2号キヤノン株式会社内

⑰ 発明者 栄田毅
東京都大田区下丸子3丁目30番
2号キヤノン株式会社内

⑰ 発明者 矢野泰弘
東京都大田区下丸子3丁目30番

2号キヤノン株式会社内

⑰ 発明者 太田徳也
東京都大田区下丸子3丁目30番
2号キヤノン株式会社内

⑰ 発明者 春田昌宏
東京都大田区下丸子3丁目30番
2号キヤノン株式会社内

⑰ 出願人 キヤノン株式会社
東京都大田区下丸子3丁目30番
2号

⑰ 代理人 弁理士 丸島儀一

明細書の添書(内容に変更なし)
明細書

1. 発明の名称

記録液

2. 特許請求の範囲

親水性構造部分と疎水性構造部分と共に有する重合体を含む水性分散媒中に顔料微粒子を分散して成り、被記録材に記録を為す為の記録液において、該顔料の分子量と該重合体の平均分子量との比が1:2から1:150の範囲にあることを特徴とする記録液。

3. 発明の詳細な説明

本発明は記録液、とりわけ記録ヘッドの吐出オリフィスから吐出させ液滴として飛翔させて記録をおこなういわゆるインクジェット記録のための記録液に関する。更に詳しくは、高分子分散剤によつて顔料を分散させた記録液に関する。

現在知られる各種記録方式の中でも、記録時に駆音の発生がほとんどないノンインパクト記

録方式であつて、且つ、高速記録が可能であり、しかも普通紙に特別の定着処理を必要とせずに記録の行なえる所謂インクジェット記録法は、極めて有用な記録方式であると認められている。インクジェット記録法に就いては、これ迄にも様々な方式が提案され、改良が加えられて商品化されたものもあれば、現在もなお、実用化への努力が続けられているものもある。

このインクジェット記録法は、インクと称される記録用液体の小液滴(droplet)を種々の作用原理で飛翔させ、それを紙等の被記録部材に付着させて記録を行なうものである。

これに適用するインクは基本的に染料とその溶媒とから組成されるものであり、そのインク物性は前記染料固有の性質に左右されるところが大である。従つて、従来、主として水溶性の染料を含むインクを用いたインクジェット記録を行なつた場合、得られたインク画像が、水溶性染料の物性に左右されて、その耐水性、耐光性に於て劣つたものとなると言う欠点があつた。

又、この様な水溶性染料を含んだインク自体の保存性も然程、高くはない。そこで最近ではこの様な染料系のインクに代えて、顔料系インクをインクジェット記録方式に適用する試みが為されている。この顔料系のインクには、得られたインク画像の耐光性や耐水性が、上記染料系のインクによる画像に較べて極めて良好であると言う利点が認められる。しかしながら、顔料はインク媒体に不溶性であるが故に、それをインク中に分散する上で高度な技術を要すると共に、その分散安定性を高めることは、非常に困難なものである。

にも拘らず、インクジェット記録方法に就いては、用いるインクに対して、吐出条件(圧電素子の駆動電圧、駆動周波数、吐出オリフィスの形状と材質、吐出オリフィス径等)にマッチングした液物性(粘度、表面張力、電導度等)を有していること、長期保存に対して安定でインクジェット装置の目詰まりを起さないこと、被記録材(紙、フィルム等)に対して定着が速

く且つ確実であつて、しかもドットの周辺が滑らかでにじみの小さいこと、形成されたインク画像の色調が鮮明で濃度が高いこと、形成されたインク画像の耐水性・耐光性が優れていること、インク周辺材料(収容器、連結チューブ、シール材料)を侵さないこと、臭気、毒性が少なく、引火性等の安全性に優れたものであること、等の諸特性を備えることが要望される。しかし、上記の様な諸特性を同時に満足させることは相当に困難である。前記した従来技術は、この点で、未だ、不満足なものであつた。

本発明は、前述した従来技術の欠点を除き、吐出安定性、長期保存安定性、定着性、画像の濃度、鮮明度、耐久性、耐光性を同時に満足し、更には臭気、毒性がなく引火性等の安全性に優れた実用性の高いインクを用いて行なうインクジェット記録液を提供することを目的とするものである。更には駆動周波数応答性に優れ、高速記録に適した記録液を提供することを目的としたものである。

而して、斯かる本発明の記録液に於ては、親水性構造部分と疎水性構造部分とを共に有する重合体を含む水性分散媒中に顔料微粒子を分散して成り、該顔料の分子量と該重合体の平均分子量との比が1:2から1:150の範囲にあることを特徴としている。

ここで、本発明の顔料系インクに就いて詳細に説明する。

顔料粒子は、水等の溶媒中に溶解しない為、それを単にインク溶媒中に混合分散しても、直ちに凝集や沈降を生じて、溶媒から分離するので、実用可能なインクを組成することはできない。従つて、この様な顔料系のインクを組成する際には、顔料粒子に対する良好な分散媒が必要とされる。

そこで、斯かる分散媒の第1成分として、親水性構造部分と疎水性構造部分とを共に有する重合体(・・・分散剤)を用い、その第2成分として水性液体を使用する方法がある。この分散媒は、約1~20cpsの粘度範囲に於て、極

めて安定に前記顔料粒子を分散させ得る。

上記分散媒の第1成分として使用する重合体は、分子量1000~100000の高分子分散剤である。好ましい高分子分散剤の1例を挙げるといづれも前記分子量範囲のポリアクリル酸、ポリメタアクリル酸、縮合ナフタリンスルホン酸、ステレギーマレイン酸共重合体、ジイソブチレン-マレイン酸共重合体、ステレン-(メタ)アクリル酸エステル-(メタ)アクリル酸共重合体、ステレン-イタコン酸共重合体、イタコン酸エステル-イタコン酸共重合体、ビニルナフタレン-マレイン酸共重合体、ビニルナフタレン-(メタ)アクリル酸共重合体、ビニルナフタレン-イタコン酸共重合体等およびそれらの誘導体である。

上記の重合体に更に例えばアクリロニトリル、酢酸ビニル、(メタ)アクリルアミド、N-メチロール(メタ)アクリルアミド、塩化ビニル、塩化ビニリデン、エチレン、ヒドロキシエチルアクリレート、グリシジルメタクリレート、ヒ

ドロキシブチルメタクリレート、等のモノマーが共重合されていてもよい。これらの高分子分散剤の幾つかは市販されており又公知の重合法により容易に合成できる。ところで、この重合体を第2成分である水性液体に可溶化するかコロイド状に分散させる目的で重合体の塩を形成することが必要である。上記重合体と塩を形成する相手としては、アルカリ金属であるNa、Kの他、モノー、ジー或はトリー(メチルアルミ)、モノー、ジー、或はトリー、(エチルアルミ)等の脂肪族アミン、モノー、ジー、或はトリー(エタノールアミン)、モノー、ジー、或はトリー(プロパンノールアミン)、メチルエタノールアミン、ジメチルエタノールアミン等のアルコールアミンや、モルホリン、N-メチルモルホリン等がある。

そして、上記重合体に於ては、親水性構造部分となるモノマー単位の比率が特に重要である。つまり、カルボキシル基、スルホン酸基、或は硫酸エステル基等の親水性構造部分となるモノ

マー単位の重量比が略々40重量%を超えると、その重合体の顔料粒子に対する吸着性が低下して顔料粒子の分散安定性を悪化させる。逆に2重量%以下になると重合体自身の水性液体への溶解性が低下してこの重合体が顔料粒子と共に水性液体中で凝集したり、沈降するようになる。そこで、上記重合体に於ける親水性構造部分の比率として更に好ましい処は、重量比で約25~40%と見られる。又この重合体は、その分子量が過ぎると顔料粒子の分散安定性に寄与しないし、逆に、過ぎるときは、インク自体の粘度を上げ過ぎ(例えば20cps以上)する傾向にある。従つて、この重合体の分子量の範囲として、約1000~100000が望ましい。

ここにおいて本発明者は種々実験の結果、顔料の分子量W₁と該重合体の平均分子量W₂との比W₁/W₂と分散液の安定性及び駆動周波数応答性との間に密接な関連性があることを見出した。すなわち、顔料と重合体の分子量を変えた種々の分散液を調製して検討をおこなつたところ、

上記の比W₁/W₂の値がほぼ1/2から1/150の範囲にあるとき分散液の安定性と吐出に於ける駆動周波数応答性が良好でありこれをはずれるに従つて駆動周波数応答性が減少する傾向のあることを明らかにし、本発明をなすに至つた。

本発明で用いるインクに於て、上記重合体の使用量は、顔料100重量部当り、略々、5~300重量部、更に好ましくは、略々、10~150重量部の範囲とされる。斯かる範囲の上限を超えるとインクの色濃度が低下したり、インクの粘度が適正值に保たれなくなると言つた不都合がある。又、下記下限を下まわるときには、顔料粒子の分散安定性が不良になる。

本発明の記録液を組成する水性液体成分としては、水或いは水と水溶性有機溶剤が挙げられる。水溶性有機溶剤としては、例えばメチルアルコール、エチルアルコール、n-ブロビルアルコール、iso-ブロビルアルコール、n-ブチルアルコール、sec-ブチルアルコール、tert-ブチルアルコール、iso-ブチルアルコール、

フルフリルアルコール、テトラヒドロフルフリルアルコール等のアルコール類；アセトン、メチルエチルケトン、ジアセトンアルコール等のケトン又はケトアルコール類；モノエタノールアミン、ジエタノールアミン、トリエタノールアミン等のアルカノールアミン類；ジメチルホルムアミド、ジメチルアセトアミド等のアミド類；テトラヒドロフラン、ジオキサン等のエーテル類、酢酸エチル、安息香酸メチル、乳酸エチル、エチレンカーボネット、プロピレンカーボネット等のエステル類、エチレングリコール、ジエチレングリコール、トリエチレングリコール、プロピレングリコール、テトラエチレングリコール、ポリエチレングリコール、グリセリン、1,2,6-ヘキサントリオール、チオジグリコール等の多価アルコール類；エチレングリコールモノメチル(或はエチル)エーテル、ジエチレングリコールモノメチル(或いはエチル)エーテル、プロピレングリコールモノメチル(或いはエチル)エーテル、トリエチレングリ

コールモノメチル（或いはエチル）エーテル、ジエチレングリコールジメチル（或いはエチル）エーテル等のアルキレングリコールから誘導された低級アルキルモノ或いはジエーテル類；ビロリドン、N-メチル-2-ビロリドン、1,3-ジメチル-2-イミダゾリジノン、モルホリン等の含窒環状化合物等を挙げることができる。

これらの多くの溶剤の中でも、記録液に対して要求される種々の特性の改良の為には、好ましくは多価アルコール類、或いは多価アルコールのアルキルエーテル類、より好ましくはジエチレングリコール等の多価アルコール類が挙げられる。これらの成分の含有量は、記録液全重量に対して、重量パーセントで、一般には10～70%、そして物性値の温度依存性を小さくする為には好ましくは20～50%の範囲とされる。

又、この時の水の含有量は、記録液全重量に対して、重量パーセントで、5～90%、より好ましくは10～70%、更に好ましくは20

～70%の範囲内とされることを好ましい。

ところで、本発明の記録液を組成する為の顔料としては、従来公知のものを含めて各種の有機顔料が全て使用できる。例えば、アゾ系、フタロシアニン系、キナクリドン系、アンスラキノン系、ジオキサジン系、インジゴ系、チオインジゴ系、ペリノン系、イソインドレノン系、ペリレン系等の顔料を挙げることができる。これ等の顔料は、記録液中での粒径が略々数百ミリミクロンから数ミクロン程度の微粒子状となり、好ましくは、製造直後の水性ペーストであるのが使用に適する。尚、この顔料の記録液中の好適濃度は、その着色力及び記録液粘度への影響を考慮すると、記録液全重量に対して、重量%で略々3～30%の範囲である。

又、本発明の記録液には上記の必須成分のほかに、従来公知の各種添加剤、例えば、界面活性剤、塩類、合成及び天然樹脂、各種染料等を併用することもできる。

本発明の記録液は、紙上の各成分を主体にし

て組成され、その調製には、各種の方法が採用できる。例えば、上記各成分を配合し、それをボールミル、ロールミル、スピードラインミル、ホモミキサー、サンドグランダー等を用いて混合摩擦する方法を採用する。

尚、顔料の分散工程は、できるだけ顔料が高濃度の状態に於て行ない、分散処理の後、これを水性液体で希釈して、インクの粘度は、最終的に約1～15cps、好ましくは約2～10cpsに調整される。

この様にして、調製した記録液は、低粘度域に於て、長期間保存した場合にも、顔料粒子が凝聚したり、沈降することがない。

そして、この記録液は、

(1) 広範囲の記録液吐出条件（圧電素子の駆動電圧、駆動周波数、吐出オリフィスの形状と材質、吐出オリフィス径等）にマッチングし、液物性（粘度、表面張力、電導度等）を有しており、特に高い駆動周波数に対する応答性に優れている。

(2) 長期保存に対して安定でインクジェット装置の目詰まりを起さない。

(3) 被記録材（紙、フィルム等）に対して定着が速く且つ確実であつて、しかもドットの周辺が滑らかでにじみがない。

(4) 形成された画像の色調が鮮明で濃度が高い。

(5) 形成された画像の耐水性、耐水性が優れていいる。

(6) 記録液周辺材料（収容器、連結チューブ、シール材等）を侵さない。

(7) 奥氣、毒性が少なく、引火性等の安全性に優れたものである等の諸特性を備えている。ここで実施例を示して本発明を更に詳説する。

実施例 1

ステレン-マレイン酸塩共重合体（分子量約1500、商品名SMAレジン1440H、アルコケミカル製）6部、トリエタノールアミン2部、水60部、エチレングリコール25部、フタロシアニンブルー（分子量560）7部を加え、ボールミルで48時間分散し、顔料分散液を得た。

(顔料の分子量と重合体の平均分子量の比

$W_1/W_2 = 1/2.7$ 。分散しえなかつた粗粒子を超遠心分離機にかけて除き、インクジェット用記録液を得た。該記録液を用いて、ピエゾ振動子によつて記録液を吐出させるオンデマンド型記録ヘッド(吐出オリフィス径5.0μ・ピエゾ振動子駆動電圧6.0V、周波数2.0kHz)を有する記録装置により、印字特性の検討を行なつた。

また、記録ヘッド内の記録液に熱エネルギーを与えて液滴を発生させ記録を行なうオンデマンドタイプのマルチヘッド(吐出オリフィス径3.5μ、発熱抵抗値150Ω、駆動電圧3.0V、周波数5kHz)を有する記録装置を用いて上と同様の検討を行なつた。

いずれの場合も得られた記録画像は耐光性、耐水性がきわめてすぐれ、色調が鮮明で濃度が高く、ドットの周辺がなめらかでにじみやぼけがなく、さらに安定性が良好であつた。また記録液は長期保存しても顔料粒子の凝集や沈降を起さず、安定な吐出がおこなわれた。

1.0部にジェテレングリコールモノエチルエーテル2.0部、水6.4部、ボルドー5B(分子量270)6部を加え、ポールミルで4.8時間分散して分散液を得た($W_1/W_2 = 1/7.4$)。粗粒子を除いたのち実施例1と同様にして検討をおこなつたところ、実施例1と同様のすぐれた結果を得た。

実施例5

エチルアクリレート-アクリル酸共重合体(分子量約5000)5部に水4.0部、エチレングリコール4.5部、ピラゾロンレッドB(分子量738)1.0部を加え、ポールミルで4.8時間分散して分散液を得た($W_1/W_2 = 1/6.8$)。粗粒子を除いたのち実施例1と同様にして検討をおこなつたところ、実施例1と同様のすぐれた結果を得た。

実施例6

ステレン-オクチルアクリレート-イタコン酸モノエチルエステル共重合体(分子量約8000)5部にトリエタノールアミン1部、水

実施例2

ジイソブチレン-マレイン酸塩共重合体(分子量約10000)6部にモルホリン1.0部、ジェテレングリコール1.7部、水6.0部、アントアントロンオレンジ(分子量456)7部を加えポールミルで4.8時間分散し、分散液を得た($W_1/W_2 = 1/22$)。粗粒子を除いた後、実施例1と同様にして検討をおこなつたところ、実施例1と同様すぐれた結果を得た。

実施例3

縮合ナフタリンスルホン酸塩(分子量約1200、商品名デモールN、花王アトラス㈱製)5部にエタノールアミン1部、グリセリン2.0部、水7.4部、パラレッド(分子量265)5部を加え、ポールミルで4.8時間分散し、分散液を得た($W_1/W_2 = 1/45$)。粗粒子を除いたのち実施例1と同様にして検討をおこなつたところ、実施例1と同様のすぐれた結果を得た。

実施例4

ポリアクリル酸アンモニウム(分子量約2000)

5.9部、ジェテレングリコールモノエチルエーテル2.5部、ベンジシンイエローG(分子量720)1.0部を加えポールミルで4.8時間分散して分散液を得た($W_1/W_2 = 1/11$)。粗粒子を除いたのち実施例1と同様にして検討をおこなつたところ、実施例1と同様のすぐれた結果を得た。

ここで、重合体(分散剤)の合成例及び実施例を示して本発明を更に詳説する。

分散剤合成例(部数は重量部)

例1. 搅拌器付きの四つロセパラブルフラスコに水5.0部、イソプロピルアルコール3.0部、ドデシルベンゼンスルホン酸ナトリウム0.5部、過硫酸アンモニウム0.5部を混合し60°Cに加温する。別にステレン5部、アクリル酸9部、ブチルアクリレート5部の混合液を分液ロートに入れ6.0分かけて徐々に滴下する。滴下終了後温度を80°Cに上げ更に2時間攪拌して重合を行なつた。得られた重合体の分子量は約5万であつた。

例2. 例1.と同様のフラスコにメチルメタアクリ

リレート 8 部、ステレン 5 部、イタコン酸 1.5 部、ベンゾイルバーオキサイド 1 部、ラウリルメルカブタン 1 部、ジアセトンアルコール 5.0 部、エチレングリコール 2.0 部を仕込み窒素ガスを通しながら 6 時間重合した。得られた重合体の分子量は約 3 万であつた。

以下例 2 と同様の方法で下記の原料から重合体を得た。

例 3.	ステレン	1.0 部
	アクリロニトリル	5 " "
	メタクリル酸	1.0 "
	ヒドロキシエチルメタアクリレート	5 "
	アゾビスイソブチロニトリル	1 "
	エチレングリコールモノメチルエーテル	1.9 "
	ブタノール	5.0 "
	(分子量 : 約 1 万 5 千)	

例 4.	ビニルナフタレン	1.0 部
	ジメチルアミノメタアクリレート	5 "
	無水マレイン酸	1.0 "
	メチルエチルケトンバーオキサイド	1 "
	イソプロピルアルコール	6.0 "
	トリエタノールアミン	1.4 "
	(分子量 : 約 2 万)	

例 5.	ステレン	1.0 部
	無水マレイン酸	1.0 "
	ジエタノールアミン	2 "
	アゾビスイソブチロニトリル	1 "
	エチルアクリレート	5 "
	エチルカルビトール	2.3 "
	エチレングリコールモノメチルエーテル	5.0 "
	(分子量 : 約 3 万)	

例 6.	ステレン	5 部
	イタコン酸モノエチルエステル	5 "
	メタアクリル酸	1.0 "
	2-エチルヘキシルメタクリレート	1.0 "
	ベンゾイルバーオキサイド	1 "
	n-ブロピルアルコール	4.8 "
	エチレングリコール	2.0 "
	(分子量 : 約 8 万)	

実施例 7

合成例 1 で得た重合液 2.0 部にジメチルアミノエタノール 1 部、水 5.0 部、エチレングリコール 2.0 部、フタロシアニンブルー（分子量 560 ）5 部を加え、ボールミルで 4.8 時間分散し、顔料分散液を得た（顔料の分子量と重合体の平均分子量の比 $W_1/W_2 = 1/89$ ）。分散しえなかつた粗粒子を超遠心分離機にかけて除き、インクジェット用記録液を得た。該記録液を用いてビエゾ振動子によつて記録液を吐出させるオンデマンド型記録ヘッド（吐出オリフィス径 5.0 μ 、ビエゾ振動子駆動電圧 6.0 V 、周波数 4 KHz ）を有する記録装置により、印字特性の検討を行なつた。

また、記録ヘッド内の記録液に熱エネルギーを与えて液滴を発生させ記録を行なうオンデマンドタイプのマルチヘッド（吐出オリフィス径 3.5 μ 、発熱抵抗体抵抗値 150 Ω 、駆動電圧 3.0 V 、周波数 2 KHz ）を有する記録装置を用いて上と同様の検討を行なつた。

いずれの場合も得られた記録画像は耐光性・耐水性がきわめてすぐれ、色調が鮮明で濃度が高く、ドットの周辺がなめらかでにじみやぼけがなく、さらに定着性が良好であつた。また記録液は長期間保存しても顔料粒子の凝集や沈降を起さず、安定な吐出がおこなえた。

実施例 8

合成例 2 で得た重合液 2.0 部にモルホリン 1 部、水 6.0 部、アントアントロンオレンジ（分子量 456 ）7 部を加えボールミルで 4.8 時間分散し、分散液を得た（ $W_1/W_2 = 1/66$ ）。粗分子を除いた後、実施例 1 と同様にして検討をおこなつたところ、実施例 1 と同様のすぐれた結果を得た。

実施例 9

合成例 3 で得た重合液 2.5 部にエタノールアミン 1 部、水 2.5 部、バラレット（分子量 265 ）5 部を加え、ボールミルで 4.8 時間分散し、分散液を得た（ $W_1/W_2 = 1/57$ ）。粗粒子を除いたのち実施例 1 と同様にして検討をおこなつたところ、

特開昭56-157468(7)

実施例1と同様のすぐれた結果を得た。

実施例1 0

合成例4で得た重合液20部にジエチレン
リコールモノエチルエーテル10部、水40部、
ポルトード5B(分子量270)6部を加え、ボー
ルミルで48時間分散して分散液を得た。
($W_1/W_2 = \frac{1}{7/4}$)。粗粒子を除いたのち実施例1
と同様にして検討をおこなつたところ、実施例
1と同様のすぐれた結果を得た。

実施例1 1

合成例5で得た重合液15部に水40部、ビ
ラゾロンレッドB(分子量738)を加え、ボー
ルミルで48時間分散して分散液を得た
($W_1/W_2 = \frac{1}{4/1}$)。粗粒子を除いたのち実施例1
と同様にして検討をおこなつたところ、実施例
1と同様のすぐれた結果を得た。

実施例1 2

合成例6で得た重合液15部にトリエタノ
ルアミン1部、水45部、エチレングリコール
モノエチルエーテル15部、ベンジジンイエロ

-G(分子量720)5部を加えボルミルで48
時間分散して分散液を得た($W_1/W_2 = \frac{1}{111}$)。粗粒
子を除いたのち実施例1と同様にして検討をお
こなつたところ、実施例1と同様のすぐれた結
果を得た。

出願人 キヤノン株式会社

代理人 丸島儀一

手 続 補 正 書 (方式)

昭和55年8月29日

特許庁長官 川原能雄殿

1. 事件の表示

昭和55年特許願 第59603号

2. 発明の名称

記録液

3. 補正をする者

事件との関係 特許出願人

住所 東京都大田区下丸子3-30-2

名称 (100) キヤノン株式会社

代表者 賀来龍三郎



4. 代理人

居所 〒146 東京都大田区下丸子3-30-2

キヤノン株式会社内(電話758-2111)

氏名 (6987)弁理士 丸島儀一

5. 補正命令の日付

昭和55年7月29日 (発送日)

6. 補正の対象

明細書の全文

7. 補正の内容

明細書の净書(内容に変更なし)、
別紙のとおり。